

2025年9月11日

立教大学国際学術研究交流制度
2025年度「派遣研究員」報告書

1. 派遣概要

所属・職	文学部・教授
氏名	鈴木 彰
派遣機関名	Institute of Japanese Studies, Hallym University 所在国：韓国
研究テーマ	壬辰倭乱／文禄・慶長の役関係伝承の調査と研究：文化権力という視点から
派遣期間	2025年8月8日～2025年8月27日（20日間）
研究経費	389,270円

2. 派遣期間中の活動

離日日および帰国日を含め、派遣期間中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。

活動内容記入例）○○に関する調査、○○氏と研究討議、共同研究、講演、視察等

年月日	活動内容
2025年8月8日	離日 ソウル市内宿泊
9日～16日	翰林大学校日本学研究所所長である徐禎完氏の主導により、韓国国内の日本と東アジアの「文化権力」に関する巡見史蹟・文化財及び文献資料の所在調査、地元関係者からの聞き取り、研究打ち合わせ。9日：仁川市内、10日：群山市内、11日：群山市内、12日：木浦市内、13日・14日：泗川市内、15日：大邱市内、16日：安東市内。
17日	ソウル市内滞在。資料整理。22日の学術フォーラムでの発表資料作成。
18日・19日	東国大学校中央図書館にて資料収集。
20日	春川市に移動。
21日	翰林大学校日本学研究所所長徐禎完氏ほかと、江原生命科学高校（元春川農業高校）歴史館にて資料調査。
22日	翰林大学校日本学研究所主催第7回 東アジア文化権力研究学術フォーラムにて研究発表。
23日	ソウル市内に移動。
24日	ソウル市内史蹟見学。新刊研究書の購入。
25日	韓国国立中央博物館で展示見学。
26日	東国大学校中央図書館で資料収集。
27日	帰国

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果、今後の研究の展望、本学と派遣機関との研究交流にかかる成果、展望等を記入してください。

当初の計画通り、韓国国内に伝わる壬辰倭乱／文禄・慶長の役に関する伝承の収集と関連史蹟の現状、およびそれらに由来する〈記憶〉の様相を調査、研究することを目的として、今回の派遣研究員としての活動を行った。受入機関の所長である徐禎完氏主導のもと、韓国国内に残る近代日本の文化権力に関わる史蹟巡見の調査に同行し、関係者への聞き取りなども含めて本研究テーマに関する情報と資料の収集に取り組むことができた。

巡見では、仁川・群山・木浦に残る植民地時代の日本支配の痕跡をたどるとともに、そこに文禄・慶長の役に由来するさまざまな伝承や史蹟、遺物などが付随しているさまを確認していった。また、16世紀末に実際の戦場となった泗川市に残る倭城趾（船津里倭城）の周辺では、泗川学研究所所長金乙成氏をはじめとして、複数の方々から地元での研究状況や資料・史蹟の残存状況等についてお話をうかがうことができた。また、2017年に発見された大正期に島津家が建てた石碑について、その現物を実見することができ、また、地元住民の方からの聞き取りによって、発見の経緯やかつてのようすなど、貴重な証言を得た。これらについては、日本はもとより、韓国国内でも知られていない事実を多く含んでおり、今後、ていねいに情報を整理した上で、両国での情報公開と共有の手続きを進めていくつもりである。

大邱では、嶺南大学の崔在穆教授他と面会する機会を得た。崔教授とは、鈴木が2024年中に韓国国内で開催されたシンポジウム（今回の受入機関である翰林大学日本学研究所主催）で研究発表をした折に面識を得た。現在、壬辰倭乱（文禄・慶長の役）にかかわる重要文献である柳成龍『懲毖録』に関するシンポジウムを準備しているとのことで、さまざまな相談を進めることができた。その際、将来的に本学日本学研究所と共催の形で本学で国際シンポジウムを開催する提案があった。朝鮮時代の思想だけではなく、日本近世以降の文学や歴史理解にも少なからず影響を与えた同書に焦点をあわせた学術交流は、参加者にさまざまな成果をもたらすことが期待され、今後も実現の可能性を探っていくつもりである。

その他、旅程では多くの古蹟・故地を訪れることができ、現地の博物館・書院その他の現状を実見することができた。また、木浦市内では、見学中に、まだ詳しく把握されていないであろう某資料群の所蔵先についての情報を得ることもできた。これらについては、徐禎完所長とも相談しながら、共同研究の一環として、再訪の機会をつくりたいと考えている。

22日に、翰林大学にて日本学研究所主催で開催された第7回 東アジア文化権力研究学術フォーラムでは、金志善氏（東京大学）、榊原千鶴氏（元名古屋大学）とともに、研究発表をおこなった。「島津家の近代と泗川の戦い——大正期以降の諸問題——」と題し、今回の滞在中で得た現地の情報などを盛り込んだ内容とした。鈴木が継続的に取り組んできたテーマのひとつに関する報告で、今後の課題を見ずえることに主眼をおいた。

鈴木が所属する本学日本学研究所は、今回の派遣先の翰林大学日本学研究所と共催の形で、2020年度以降学術フォーラムを開催し、その成果を論集として日本で刊行するなど、学術交流を深めてきた。今回は鈴木が研究員として受け入れていただき、上記のような充実した時間を過ごすことができた。継続中のフォーラムの成果は、二冊目の論集としてまとめる予定であり、本学の大学院生にも寄稿を依頼する予定である。日本学に携わる両大学・両研究所の交流が、これまで以上に深まることを実感できる派遣研究期間となった。こうした機会を与えてくださった翰林大学および本学の関係各位に心より感謝申し上げたい。